當流

茶之湯評林大成　一

431

獨倚南牕筆を取ハ自然と是の此寳

求む乎おく梓りもよ也茶道を

古人の善言をあつめ極まい数とせる

我獨清めくハと此世の風俗に不叶凝滞物

能世と推移心めく容膝と自的ね怡顔

むべなるかな幾年月かならべたまへる事を
世に調法の奇なる事をかんがへ茶湯評林と名
く茶道は廣なる事を事として根始を紬て銘
好人はじめをも補ふべし是ハ予がかたる也
廣長軒元閑序

茶湯評林巻之一目録

狩野正信筆　十分だい
雪村筆　王照君
渡唐雪舟筆　自書雪舟像
古法眼元信筆　さる犬
狩野真乗筆　ことば小町
一休和尚之筆　烏鷺羽
狩野雅楽助筆　吹笛
狩野松栄筆　唐子雪ころばし
狩野玉楽筆　巣鷹

稲野永徳比下定家て
稲野孝信卞節分比大豆
休白子比卞松よ卞絲
稲野探幽守信比卞下たちたき
同自適筭卞下万歳
同永仁比卞下西行法師
同右京時信比卞下負足比餅
土佐光信比卞下寄仏
同ね監光起比卞嵐比餅ミ作
稲野常卜筭常信比卞下ちろまる

守景比娘雪信の卞下す半能比柳こ在
数なる之助卞下かゝしき
稲野山楽比卞下平太盛
土佐光持比卞下こそちひ
縫殿助比卞下当盛風比小女
稲野伯信筭卞下人寄
渡邊了敬卞下乙尼
稲野洞雲卞下猫よつぶけ
同外記卞下比瓜売てく
狐曲子比卞下信旗

牧谿法常和尚か讃布袋
宅磨栄賀か筆 渡酒
相阿弥か筆 釣鯛
僧可翁か筆 貧之
長谷川等伯か筆 捨小路
日久蔵か筆 時宗筆秀力らく
等與か筆 小坊主 京阿弥か筆 其徳寺
秋月か筆 水中[illegible] 宗丹か筆 井筒水かゝミ
等観か筆 かきつはた 相阿弥か筆 松下禅尼
畫工の伝記

茶湯評林巻之一

凡例

一 懸物ハ色々探く此書にあまさるを書す されとも畫工の筆作にあらさるもまゝ多し又蒔季比作あへかくもあらさる人の心を和らけむるためなり

一 下を書ハ家の古書事ハ畫師に傳く下数多し廣なる故下からを由そり書記 絵だらかなくハ書写せ下を一の心へ んせしむ然とも絵比書様下書道なり布る畫工ハ恥をかくしても書と思ひ給ん人多かるべし直なり 畫工比絵をかまへ書ハかくしても此よきの書かなり

好人畫師繪好頌さんハおもひつきれたるらん殊に本繪
風と板下此風とハ大にちがひ候とも其是非申に及ばず
一唐繪ハ古じゆしも不記本朝の畫工の繪計をみせしむ右の心設し
一真に偽繪をまじへ繪にもや下に付て此繪にも本朝の畫工もはまさ
由へこしくハひらかれ候一稀有の元祖分明代まで好む人々と
を記ス、其外ハ世人の知名人の分を除けて記し置せ
一茶湯の物ハ墨跡を貴ふとして其書ハ不記繪事外様と申
一ツにも墨跡ハ先人ハ古て跡ありて筆跡何を好人にて頼む
事しれ故に不記 井下ハ文字吟しに申ざる此を古書

狩野正信筆
俗名四郎二郎 又大炊助 法眼位ニ叙ス
剃髪名祐勢 号ヲ正信ト改ム

一此繪を十分とする人数ハ三聖人と八分此氷ハ
去る筋にて九分ハかりにて十分如くハ子敵る

雪村之繪王昭君ニ至ル行寫

雪村筆

雪舟此自畫ニシテ七十歳像

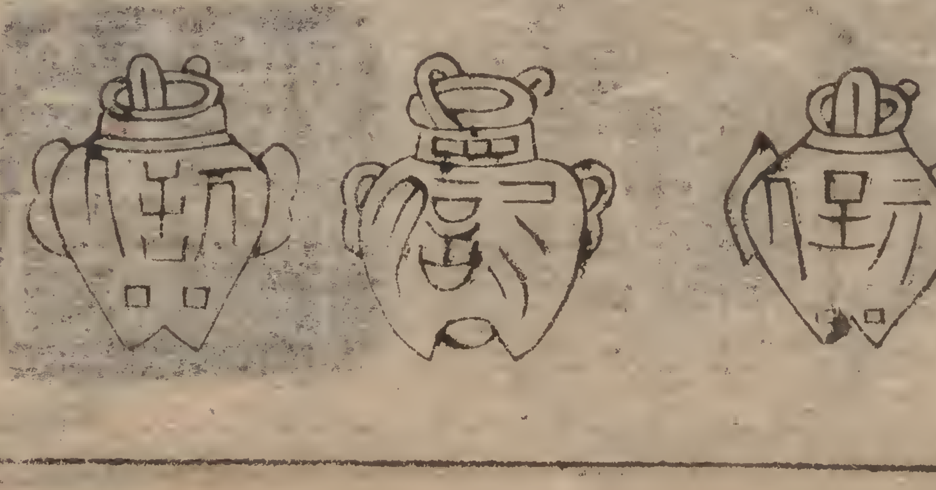
渡唐雪舟筆

行年七十歳雪舟筆

狩野古法眼元信筆

生年七十歳

ちゞ犬の子をあまた乳をのまする図



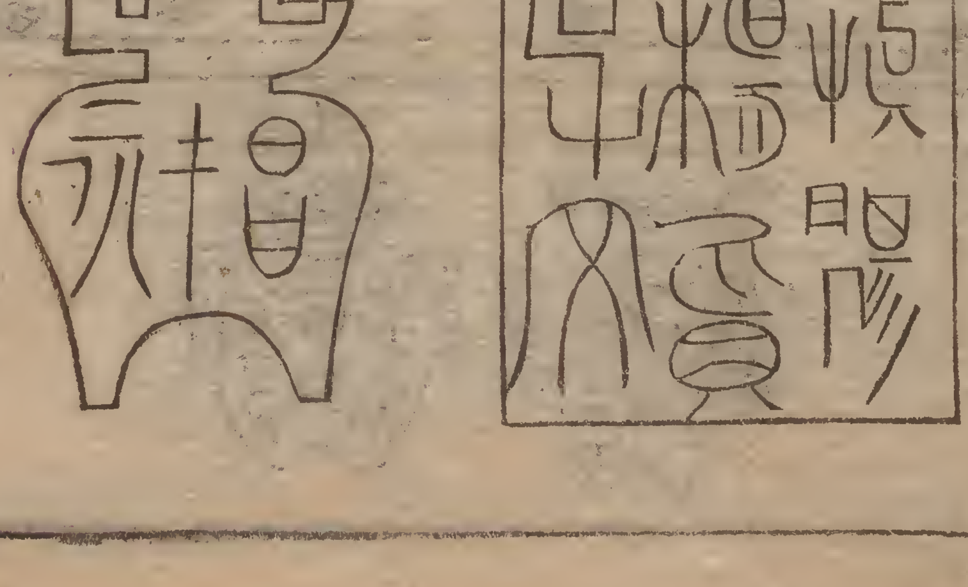
一 狩野松栄の絵 俗名治部法印と云 季判がよろし

一 そとば小町の絵 小町のおとろへてそとばに腰かけ休むところ

一 休和尚之繪

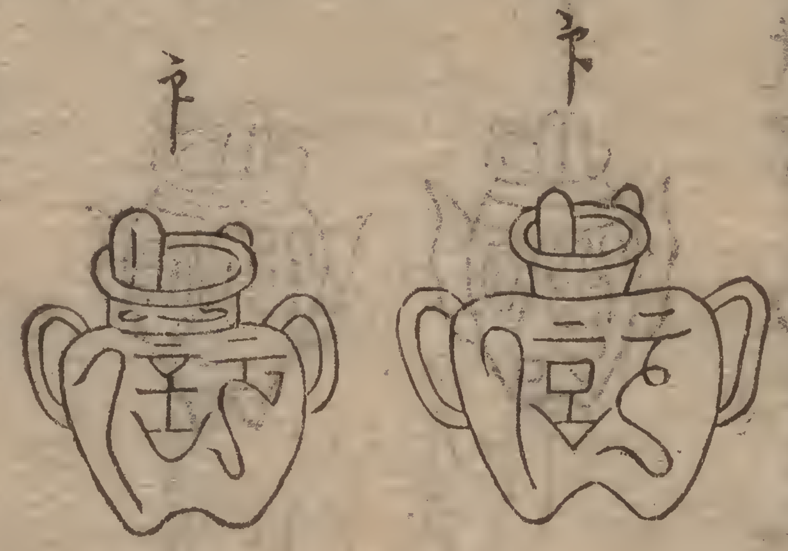
諱宗純卜号大虚子宗曇華叟ヲ嗣法

一 乱羽烏之図

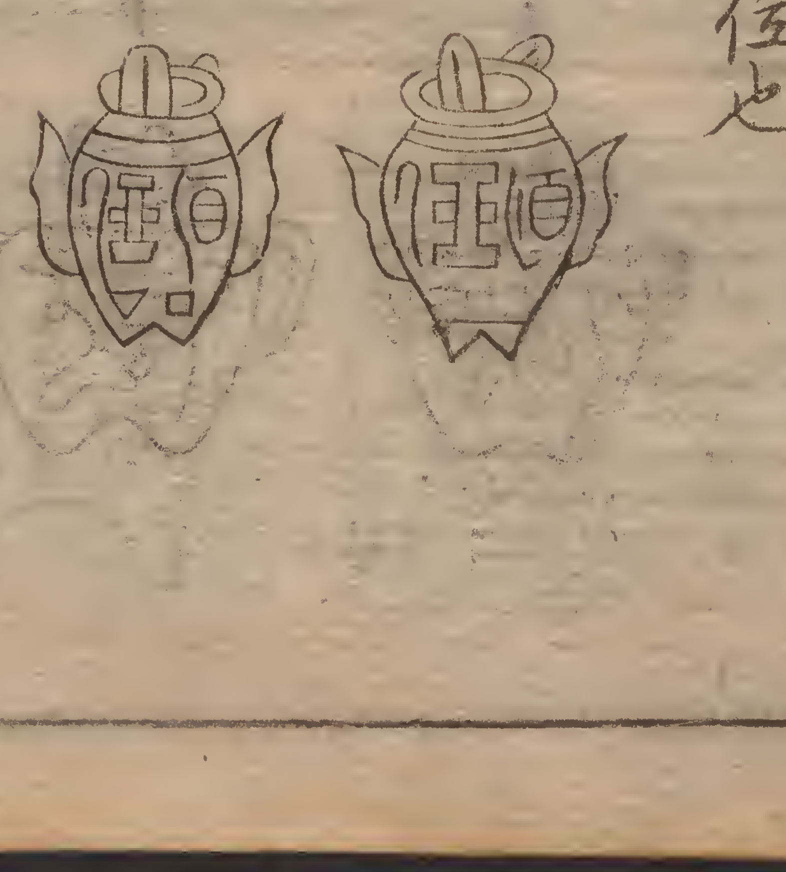


一 狩野雅楽助之繪

一 吹笛之図 玄宗之楊貴妃ヲ
ふえをおしへ給ふところ



一狩野松栄又正永或ハ正栄
左京治部少輔諱直信
法眼位也



一唐子此雪ころばし

一狩野山楽之絵
小田原氏政画師也

一巣篭此山より出るを顕ス
草むら上までもよそふ哉

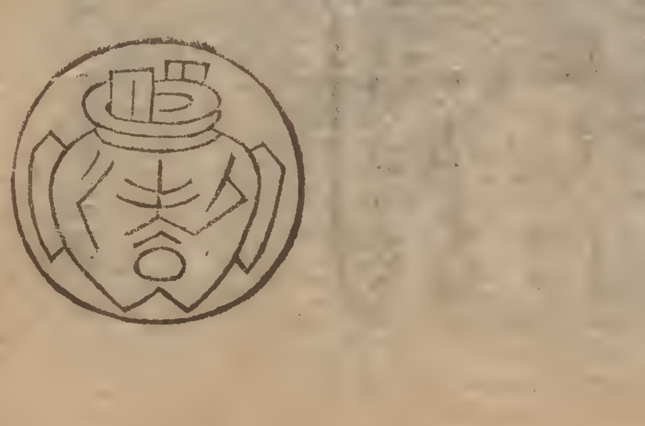
一 狩野永徳之絵

若右源四郎 後右京進信ト云

法眼位を賜ル

一 中納言藤原定家卿ト式子内親王ノ哥

和哥ノ大意ト被申タル哥

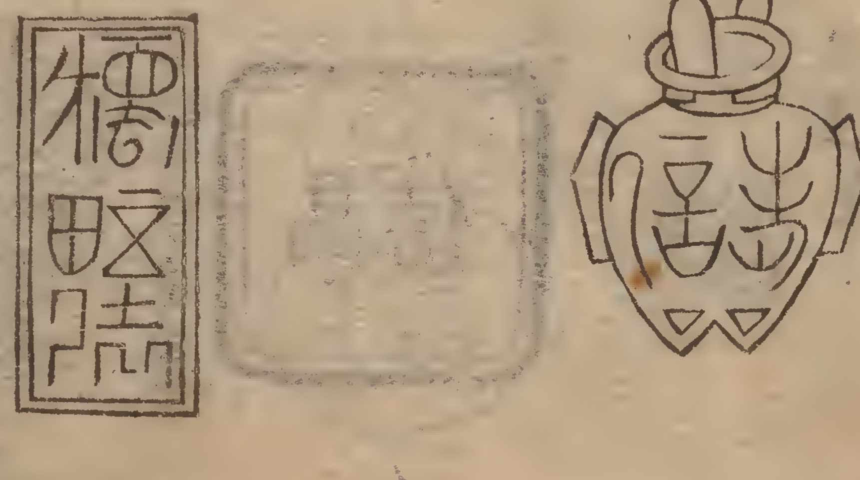


一 狩野孝信

右近将監 永徳季子 探幽守信永信ガ父也

法眼位ニ叙ス

一 節分之夜大黒をなくる所画



一休白子左馬作諱昌信 永徳ヵ甥 松栄ヵ孫也

一松ノ枝ニ印籠巾着かゝる図

昌信

一狩野探幽守信 弱冠采女 剃髪して探幽斎と云 法眼 後宮内卿法印ニ叙ス 筆峯生明大居士

外題ノ印

法眼書印

守信

生明ノ瓢箪印有

法印行年書ノ印ハ四角印也

一極楽もれちちたるき此図

自適齋筆

一 江戸万歳(エドマンザイ)の図

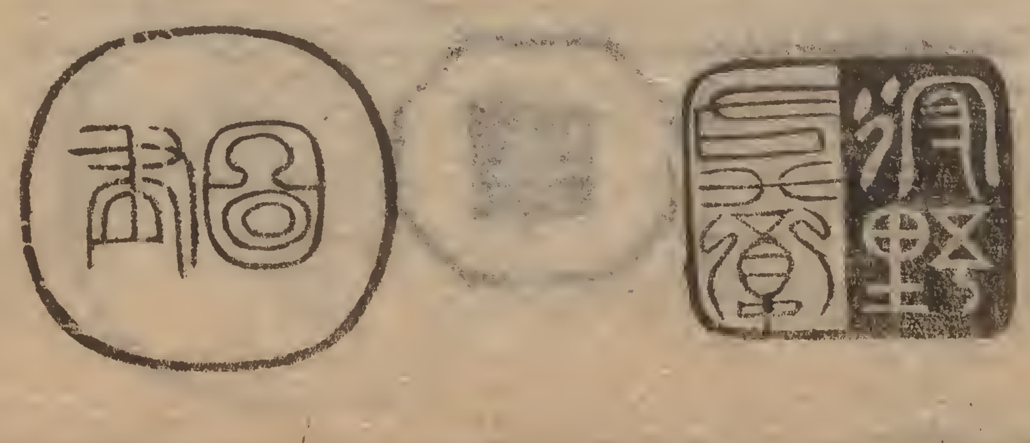
尚信(ナヲノブ) 主馬介(シユメノスケ) 探幽弟

一 法眼永真(ホウゲンエイシン)の筆 俗名(ゾクミヤウ)源四郎 右京亮(ウキヤウノスケ)安信 剃髪(テイハツ)の後 牧心斎(ボクシンサイ)と号(ガウ)す

一 西行法師(サイギヤウホウシ) 右大将(ウダイシヤウ)頼朝(ヨリトモ)より給り 銀(ギン)の猫(ネコ)を たまひ賜る時 門(カベ)のあたりにて 子どもにとらせける図

一 右京時信御筆之絵 御名添田印

一 正月具足ニ御かざりなさる所 餅のさま たまさる八足 昆布 上り まきん包 侍法師光



一 土佐光信御筆之絵 後ニ刑部大輔ニ任ス

一 三拾六人の哥仙一人／＼かゝるゝ所

一 鼠の餅を引図

土佐将監光起之画

一 狩野養卜斎常信之絵

采女助尚信が子

一 はるごまのならひをするところ

一 雪信(ユキノブ) 女畫(ヂヨグワ)なり 清原氏守景(キヨハラウヂモリカゲ)がむすめにて 探幽斎(タンユウサイ)が姪(メイ)也

一 すがれおとごせて

清原氏女雪信筆

トヂノ上ニアリ

一 数多(カズニ)之物の絵

一 かけもの人物絵

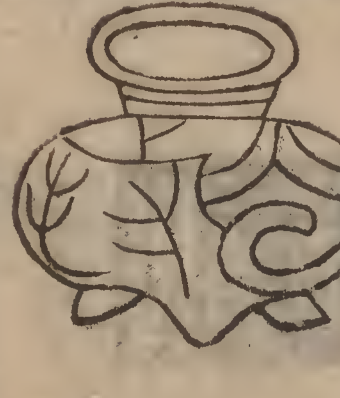
一狩野山楽之絵　諱光頼　幼名平蔵

木村永光寫之

一平忠盛祇園にて鬼形をとつつまへたる図

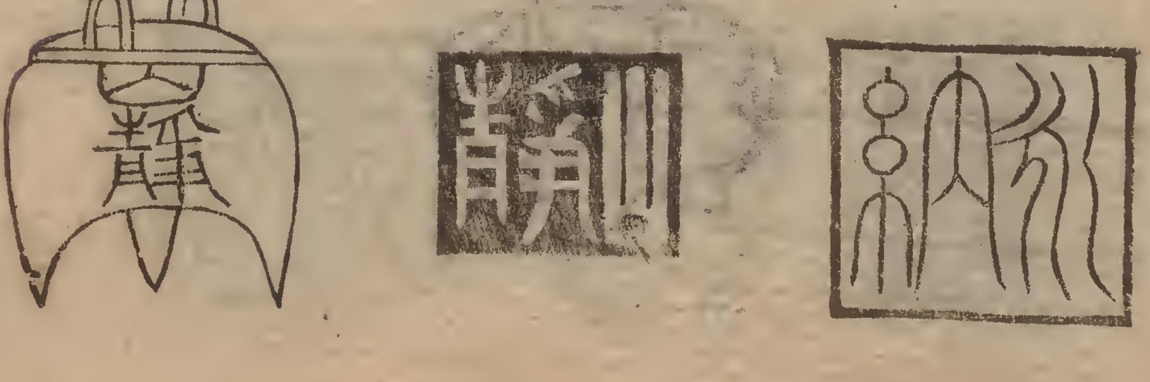
一土佐光持此絵

一すり鉢にすりこ木にうぐいのとまりたる図



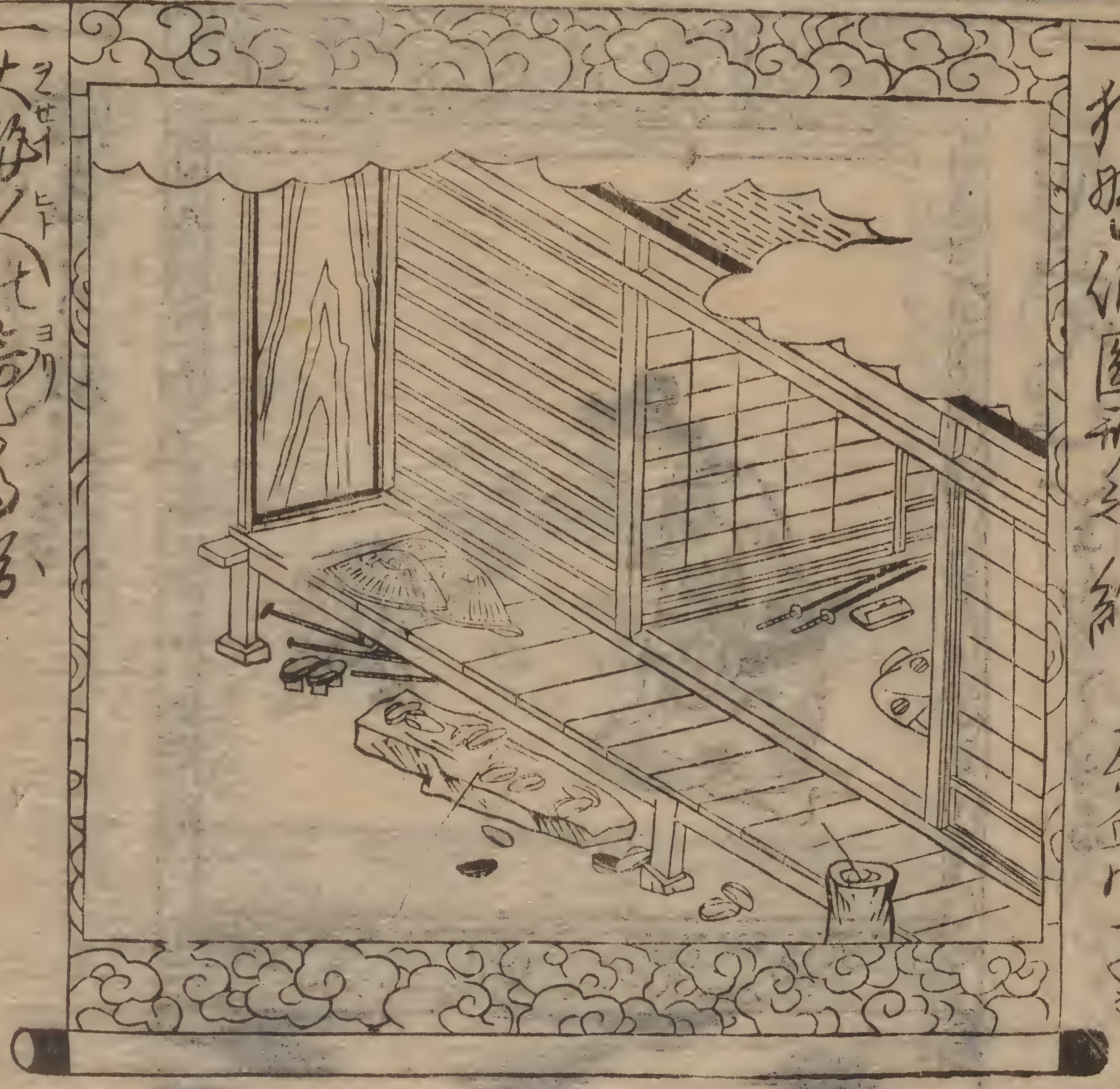
一 縫殿助之絵　ほ永納ト云

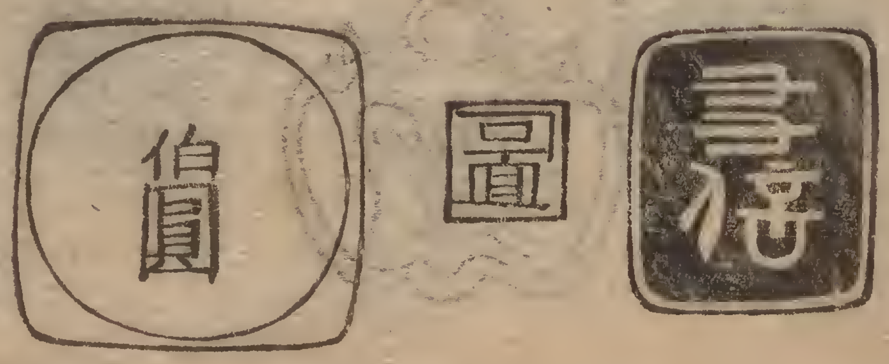
一 當世風の小女すがた絵の図



一 狩野絵図所之絵　友益ハ子之

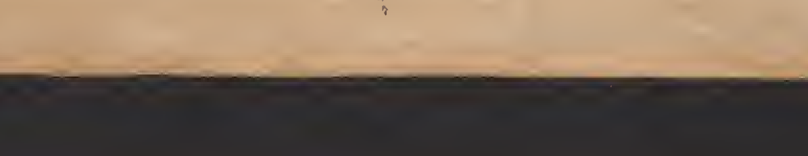
一 大勢人の寄くる図





一渡邊了敬の繪

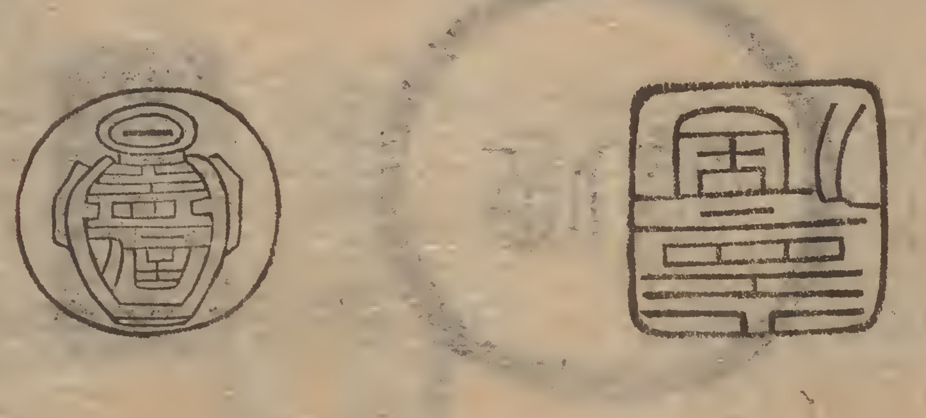
一三歳にして是をゑかける者



一狩野洞雲 諱益信、俗名采女 探幽が養子也

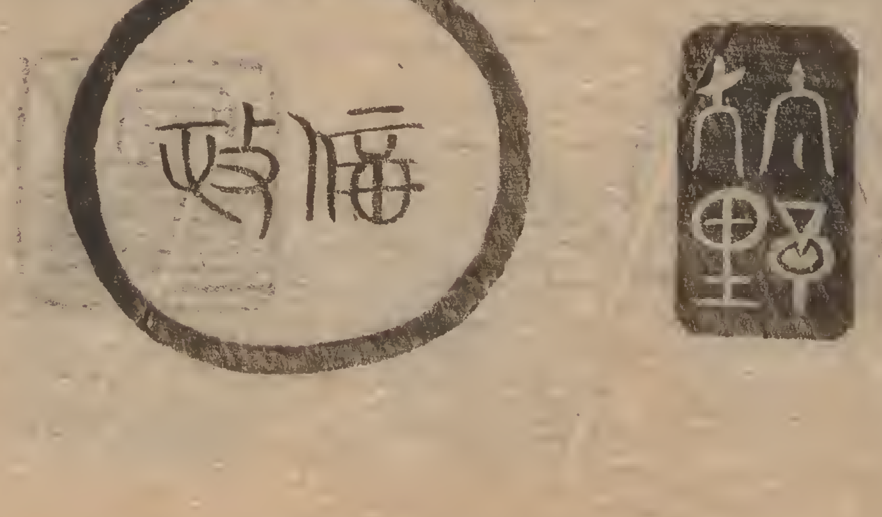
一猫のうをたけをくらひにげゝる所也

影あり



一 狩野外記（ゲキ）　古外記（コゲキ）と称（セウ）ス　諱信政　法名（ホウミヤウ）素川（ソセン）

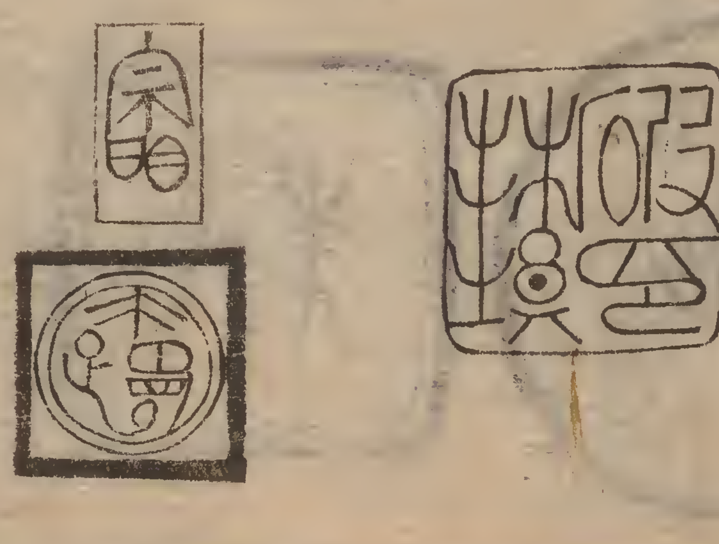
一 此図ハくろびさる筆



一 僧明兆（ソウミヤウテウ）　兆殿司（テウデンス）又吉山と号ス

一 鍾馗（セウキ）ハ橋（ハシ）の上ニ居（イ）邪鬼（キ）ハ橋（ハシ）の下にいる筆

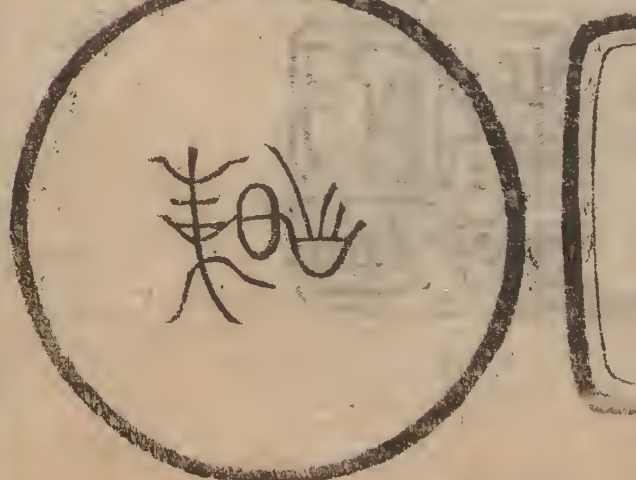
明兆筆



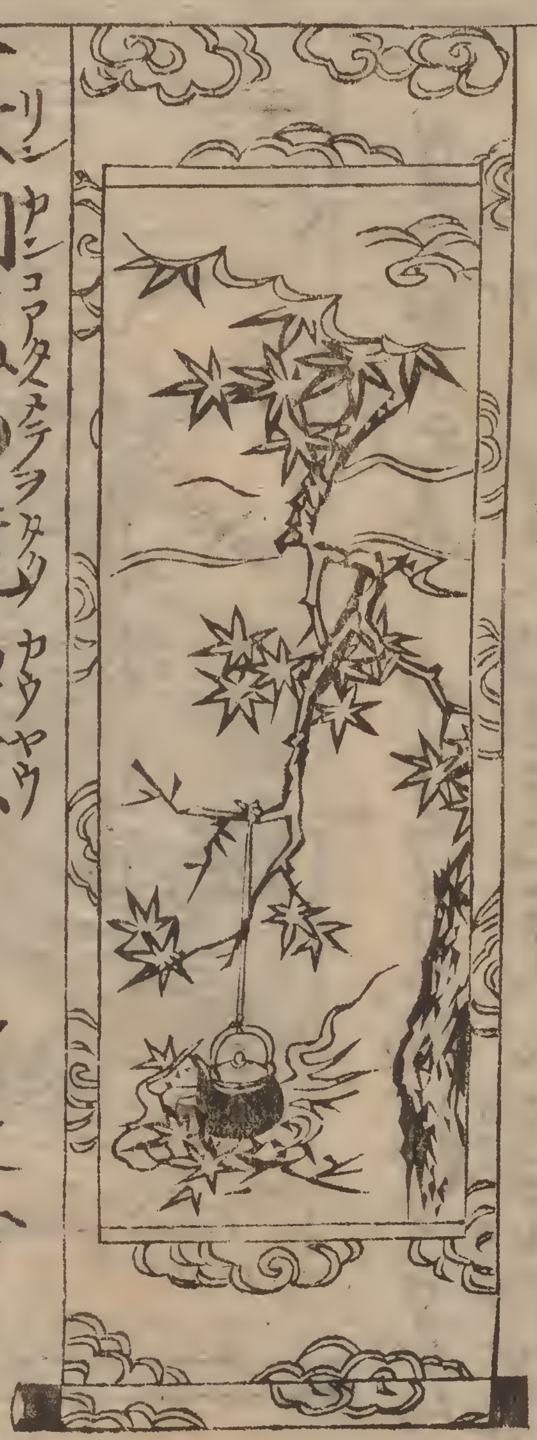
一瀧本坊昭乗　中沼氏

南山隠士惺々翁

一布袋の絵

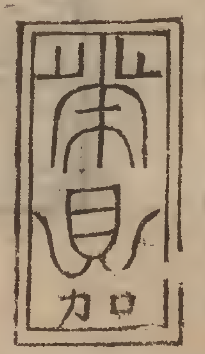


一宅磨栄賀　法眼叙ス



一林間煖酒焼紅葉と云詩の心あるく書ける絵

栄賀



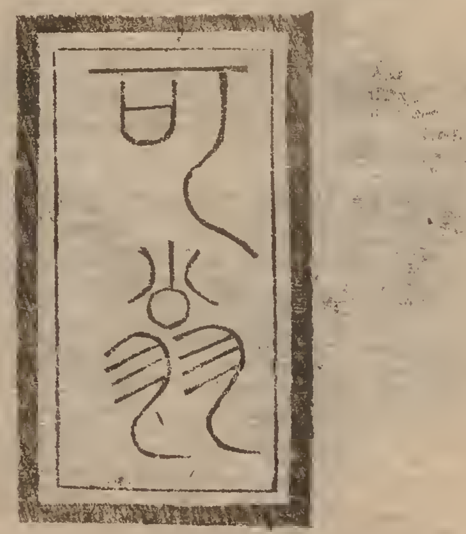
相保

一大なる鯛を釣あげたる絵　さりとは此表具は海なるらん

俗名　海田宗如

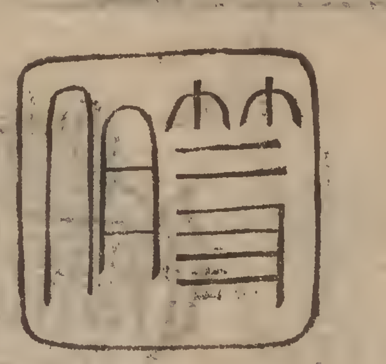
一僧可翁 宗範ト称ス又良全ト号ス南浦紹明か弟子也

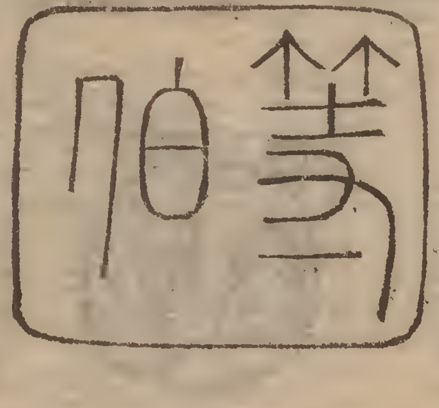
一身貧乏にしてもる屋根をもる雨をいとはぬを
かくのごとくぬかせざても学文を心がくるハまことに
君子の道なりんと貴く記する図



一長谷川法眼等伯か絵 若名久蔵

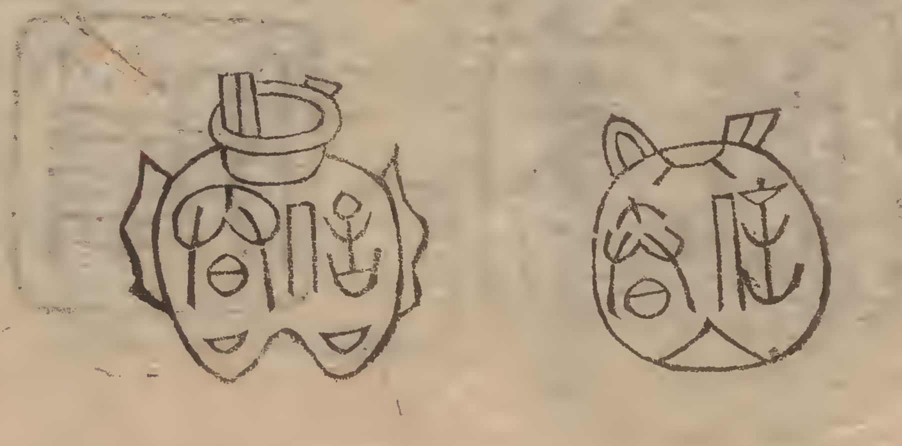
一土佐坊正尊が弁慶に擒にせらるゝ図





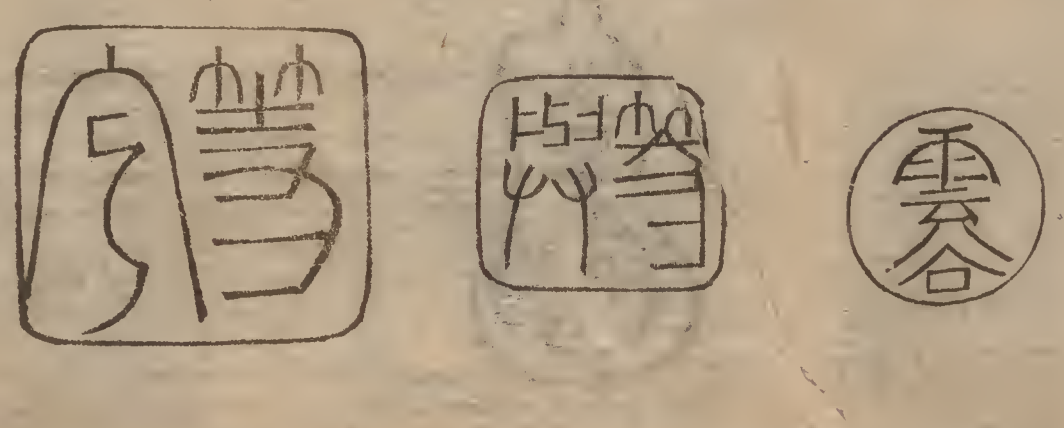
一 長谷川(ハセガハ)久蔵信春(キウゾウノブハル)が絵　等伯(トウハク)カ二子之

一 曾我(ソガ)五郎時宗(トキムネ)朝比奈義秀(アサイナヨシヒデ)と戯諍(ケンクワ)の図之

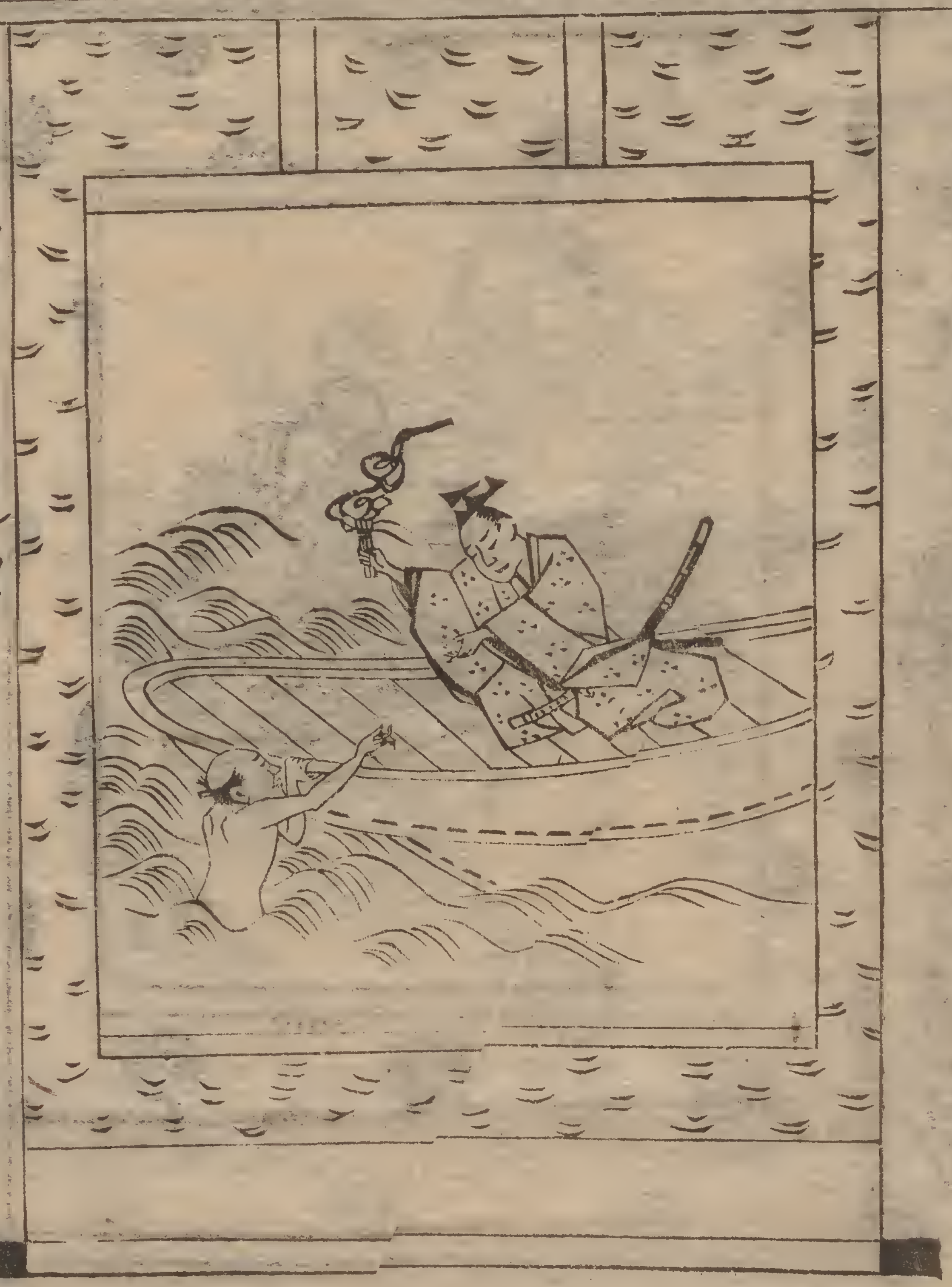


一 法橋等與(ホツキヤウトウヨ)　雲谷(ウンコク)か孫ス

一 小坊主(コボウズ)が比たゝの焼(ヤキ)くもちなる如きを図ス



一畫師京阿弥がかきし絵



一青砥左衛門藤綱川にて銭拾文落し此銭をひろはせんとて大勢人をやとひたる事を賞たりし図

一僧等観 秋月と号す

入唐秋月

一水中にひらたんとうけく かしらをおはうし尾は潜り尾を押八口しうた一曲のさの如きと云

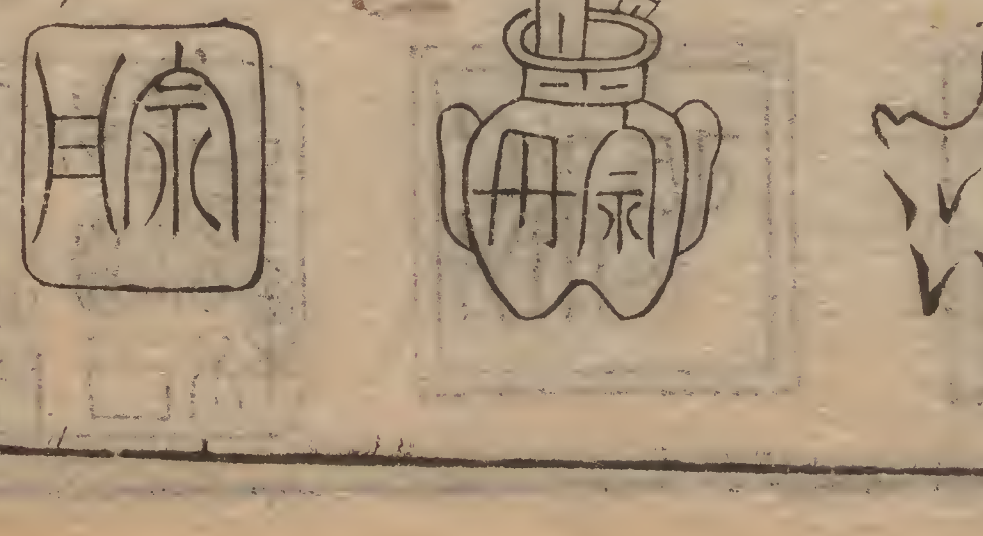
入唐秋月

秋月

一 小栗宗丹比絵

つゝゐづの井づゝにかけしまろがたけ
過にけらしないも見ざるまに

一むかし田舎わたらひしける人の子ども井のもとにいでゝあそびけるを大人になりければ男も女も恥かはしてありけれど男は此女をこそえめとおもふ女は此男をと思ひつゝおやのあはすれどもきかでなん



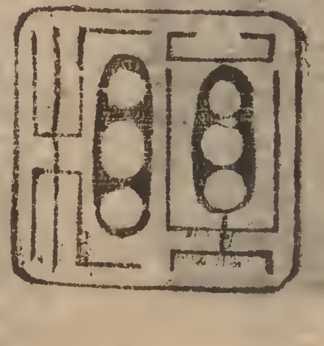
一 雲谷等顔の絵

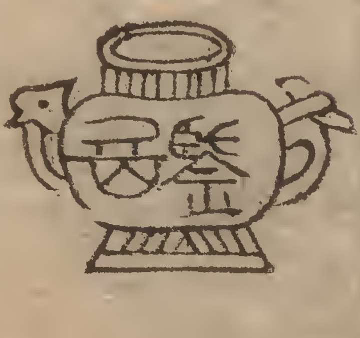
ひとり灯のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とするぞこよなうなぐさむわざなる 文は文選の

あはれなる巻々白氏文集老子のことば南華の篇此国の博士どものかける物もいにしへのはあはれなる事多し

一 相阿弥此絵 真相又鑑岳ト号ス 真相筆

一 相模守時頼の母ハ松下禅尼とぞ申ける 守をいれ申さるゝ事ありけるに すゝけたる明り障子のやぶればかりを禅尼手づから小刀して切まはしつゝはられけれは 此絵





画工伝記

一 狩野正信 狩野元祖なり藤氏也 又別相州小田原の人なり
ハ伊豆国住人狩野景信が後駿河守維景乃後裔とし 又伯信と号す 後祐勢
院永享年中より初て慈照院義政将軍ニ仕へて画士師と
なる 古法眼元信の父なりと 元禄九年丙子まで二百七十四年に
及ぶ 因文を師とし 又小栗宗丹に習ふ 人物ハ宋の梁楷をまなべり
初め公方家金閣の絵を宗丹にかゝしむ 未畢せずして死す 宗丹海
鋸して京師より公命あつく 宗丹に恐れて志あんとす 宗丹金
殿の絵ふおいて自ら停滞の宮前ならざるを辞し 他によ正
信をまねく 是を恐くしめけり 宗丹の言にしたがひ紙にかくとぞ

懃密謙儀の心あるを云ハしるし事におゐて正位よく茶儀
にしせる事を云へれたり其子元信を始るに至て精妙
氏族ハ天下畫工の長と称せり畫風古を先とし此切ニ
一僧雪村 諱ハ周継又鶴船老蒲と号し佐竹の一族常州之産
の村田氏の人也性又好で僧となる天性畫を好ミ雪舟が筆法
を慕ふ深く弥ふ師としそ其筆意を納む或ハ云雪舟ハ西よりて雪村ハ
東にありいまだ同じく面謁せざれども畫法をよく師として重故
に相似と俗し多く畫をなさざるとそ二十不したれ天生ハをうさつせを
山に於て長ずり人なる尾につぐ雪舟が流ず此人也周継ぞ
左の如く云名ひとりうるし別ニ傳ふ洞書が弟子俗名田村

平僧奥州田村の人也後常陸国太田の里に住せり正親町院永
禄年中此人有りとぞ
一僧雪舟 諱ハ等揚又備渓斎と称し或ハ米元山主と称す
姓ハ小田氏備中赤浜の人也今に至るまで其比類あるまじ天性畫を工
にて如拙周文を師とし其法を得て更に己が新意を出し
弟子力を好るハせり初時師院にのなるたるがゆへ畫僧をもて其ふ
師太に遣せざる時に涙く精妙の奇特ありて長者を驚ろかせ
しりバ弦に叢師此弟兄を得て壮年に及ひ又他師を得て実
楽にあそびてりきる事精に洋がかり寛正年中に大明に渡て
回明天帝に上り第一座となる故に畫法に於ても宋明天

唐土第一座とうけり又ハ扶桑紫陽等楊と称せ大明にも名高し
時中國の邦域に能畫の人ハ誰とかあると云へハ明人の曰く當世
畫李氏と張氏とは二人高手なりとて等楊其畫をもつて見ん
て云我遠く明國に渡るも心ざし畫師をもとめんかため
と二氏の畫跡を見る師とし学ふにたらず大明國中に師と
すべき人なし唯明國に於て得る所ハ名山川草木の絶
景是我師なり師ハ我にありて人にあらず豈他にもと
めんや是よりいよいよ名をあげてそこにも大明君臣ともに尊
をも称せ強て勅をうけて礼部院の壁に画く文字永世の
ますにいたれりや又明人の請により書して本朝の富士山三

保の浦清見が関の三絶景を画しあたふ其時の鴻儒詹仲和
其上に賛をくはふ本朝に帰りて後此外大明にておもくあそま
せを称せり其後帰朝の後防州山口の雲谷寺に居す故雲谷と称
せり古人ハ明示の跡を好まずそれに一家をたてる事郭如たり山水
よくせり人物是につぐ花鳥是につぐ牛馬を能し龍虎是に
つぐ人物するやもく八筆を一點して形をなす法宣毎より
秘する常に水墨をこのみて丹青を用ひる事まれ之筆力
精活揚くとして龍の水を得るがごとく優長抜群の奇な道
是ハ他にかゝらんば自畫半身の像有り別号 薩陽 備陽
楊知客 等楊 雲雪 楊生徂 大明にて久く畫ハ李在を

号ひも正玄を師とし應永廿一年庚子誕生す永正三
年丙寅八十七歳にて卒す
一狩野古法眼元信 祐清正信が子初名四郎二郎又大炊助
と称す其後越前守に任じ剃髪して永仙と号す嘗て
法眼位に叙す世に古法眼といへる是なり畫を学ふ事又
起たる古法眼より狩野氏此家を興す土佐光信が聟と
なる土佐氏家族なるゆへ元信は始て絵所の預りとなる
畫叡覧の中にて細密濃潤にして清秀之山なる人物を獻
花木禽獸を極く精工にして近世土佐氏の和畫に當冊
の畫意を極むるに至る元信は其要をつくし和漢を兼し

とも、より家をなす彩法は甲より永正の比数幅の山水花
鳥を作く明の國に渡り達智知勧鄭沢是をもて日本の百
年来は清貧事を未知とし亦士良が筆にありて必ず屋
絵寶鑑の例にあらんと別書をもて欽賞せり元信
かつて絵し行脚をめぐらし山川の風景をたつねて狗
據を團の自ら畫匣をく見麻衣畫是を類を拾ひて
此師ら高野根来の経所にありと云は広く筆絵を施せ
る文彫金工後藤祐乗と交友たりし事今もこれ秘術は元信
が畫徳に似て或は異形を夢に見て始て天狗の奇形を妙出
たるもと数多の臺酉に在り凡て元信が名跡絶世に傳ふる

物多し学ぶに知の山のかゝるを馬遠夏珪牧渓玉礀舜挙子
昭が浄色人物ハ又かゝるを夏珪梁楷顔輝范ハ銅趙昌る
舜挙 和画ハ信実光信が法を執り甚一世学勢自他の
本宗あげてかぞふべからず中にも画絵に功あること殊に大なる者
ハ後土御門院永禄己未十月甲辰卯年八十三にして卒スと二
なりく二百六十年に及べり或ハ玉川と云り
一狩野元信 法眼ハ正信が子之 扇面多し絵に家風を
なる信正と云又雅楽助と云
一休 後小松院の二子なりと云り後の小栗の二字ふなり行り
とこうしかするをいへり曽我蛇足を師として画をなす

べりもてあそぶる逸狂なりし山水花鳥人物にいたるまで墨に
清拙の気象出家之後所々詞をよむ也又和尚後は八心游戯す
縦に詩賛をはなれて無宗没名なるもかくのごとし風骨なるのを
一狩野雅楽助 幸にて輞隠の字ある緒耕が仲子古法眼の弟
山水人物花鳥ともに極く元信に似たり下なきに也ハ
古法眼にあるやうにはあらねどもいさゝかほきまで元信
よハし及ばずと 諱 之信とも云
一狩野松栄 元信が三男之舌 兄雅楽助世を放に成徳をよく
剃髪にて松栄と号し法眼に叙して画業よく上遺
する絵なり又よく画を 天正年中に卒去寿八十九 諱

圭信名源七土佐光信が孫之後柏原院文亀年中の人也
一狩野玉楽 元信が弟子にて筆法元信をまなび妙なり無下なる
者ハ世人元信が筆作と云 小田原氏政の画師なり
一狩野永徳 松栄の長子にして家伝を元信よりうく山水
人物花鳥皆細画をよくし大画あるひハ掌画ハことに筆
をもち大抵粗風にして新意を出せり奇と快とをもつて自ら
一家の妙をあらはすかくのごとくなれバ世に大画と称する者百
年来いまだあらず天正庚寅秋九月又子光信に先だつ年四十年
卒八歳
一狩野孝信 永徳が季子也永徳没して光信死しく後
禁裏綵洞殿中粉飾ハ孝信皆絵するを勤む宗箇
又かんにも家法を元継紡維をもて雅趣あり洛東の
泉涌寺の涅槃の絵南禅寺法堂の天井幡龍八則落
信が作也 長子三男一女あり季子ハ探幽中子自適斎季
子永真女ハ守景が妻也紋が母をして法眼位に叙せ
一休伯 子永信が嫡松栄が孫之
一狩野守信 孝信が長子孝信より絵事を習ひ禁裏南殿の
賢聖の障子を画くかるゆゑ母丹青妙絶又にほひより
自然に狩野氏を一変し自一家をなして秘法眼より叙り
て法印に叙せ太上法皇の勅賜を受し宗

玉澗を拝し探幽として其容を写さしめ今般若院
に蔵する所の聖像之後陽成院筆に出七年壬寅生と延宝二年甲
寅十月十五辛丑春秋七十三歳
一 自適斎孝信 仲子之
一 是は右近将監孝信が妻子之左近将監光信が妹伯母
一 時信 永真が長子之
一 土佐光信 廣周が子之先祖藤原の氏族也是より傳代
土佐と氏とす絵所の預り後に刑部大輔に任ず和画の
後には妙本万物を写く古来和画に名ある者筆宗傳寫
沙門覚融宅つる經書ある之されぬ光信が画談兇せん輩を

継図してもとめたり其ころ三好紙の詞を写らく其代の能画
〽光信が風俗を光起ハ藤原経隆土佐守に任ず後に任
下絵所とある経隆が子行光越前守に任ず又延元年に
絵所とある行光が子光重越前守に任ず明徳元年に絵
所とある光重が子廣周土佐守に任ず文明年中に
永享十年に絵所とある
一 土佐将監光起 伝絵ありしまで
一 狩野常信 中務と号 用部丈
一 易信 其画之名を云守景が娘探幽姪之
一 狩野山楽 其村の光信が子之狩野永徳に従ひ弟子を云

謁し秘筆細屈能あるゆへ台命によりて永徳に従て
父子の契を遣し改て狩野氏をなのり修理亮と号す
用筆は法性の正傳を得り東福寺法堂の天井に蟠龍永徳
絵せしむ然るに半にして病に臥して補成を光頼に授て
之を継しむ又摂州天満の豊公興隆す光教をして絵屋
太子の縁起を當麻に写さしむ豊公逝去し後浪々と
成り男山の滝本坊に寄り是より且謝と号す
東照大神君駿城に移して京師に帰住せしむ剃髪して
山楽と号す元和年中に天満寺の再興より之を
再興に及く宗傳之を写す寛永九乙亥八月丁酉卒す年七十七

一 土佐光持　後小松院御在世年中の人と云
一 狩野縫殿助　永納
一 狩野伯円　友益此長子
一 狩野洞雲　益信
一 狩野外記　古外記と称す後改法名無三右近蜜之
一 僧明兆　兆殿司之族類の人也東福寺大道の弟子となる分
年より画図を好く甚師意に叶はず已に師弟の縁を
絶せんとする時たまたま画閣清香の木鳥と云る師是に
驚く事ならく非常に仰し夫より伸して是をはしめ
専ら道釈の像及宋の李龍眠をまなび又元

の氣韻とまつ雲の流のさらさハ天性自得超絶し
て神ミ入遠く筆意の有にあひてぬるもの多く殆し山
の范ゐるハ也まるるにしてきぞとしへ古仏像人物をおいくハ
殊に妙なり其後一乃名益さり凡そ天下大に唱此あまり勝達
院主描山を賞玩せられ佛法の法とやへ太いなる心を
感慨せしめる門の創とあつかひしを繕う前田院の傳ス
別名赤脚子破草鞋宗ぬとより後光厳院文和年中此人あり
一瀧本坊昭乗石清水の坊官也中沼氏にして男山の麓
急ぎなとをまなび殊に能く書を博く古法を学し
自ら松花堂と称す書を能くし世の為にをりしせらる益

も又ミあり狩野山楽に学ぶ寛永十六年九月十一日歿
きぬ十六歳式部卿と称き
一宅磨栄賀文安頃の人大和に住し法眼に叙ス後栄賀と向ひ
寶岳西知仏像を描く李龍眠の筆意に依り先年武
神社ふ年とふよ栄賀細にして和画古風を変して新
にふ中古の筆法とするも者の後二條院乾元年中の人也
一おに傑俗名海田采女書画に妙なり後也法門院文正年中
此人あり
一僧可翁雪舟をまなふ八秋の寧一山乃題名も名して
海西人と号仮名にしてトり墨画の宗とある八世人仮く

牧溪の画く所を又伝へて宋に入て帰朝の後畫を
まなびし或ハ又雪舟の筆法を[illegible]終名良詮とそこ
一長谷川等伯 能州七尾の人 世に深く名高し
畫術を好ミて家を興さず京師に入て大徳寺の三玄院に
寓居を得 牧溪が畫法に倣て己が一家を立 自雪舟五代と
称す 然れども雪舟の僧孫等春に随ひ畫法を伝ふ
いふ 別伝に曰 長谷川の祖ハ雪舟より七代元八[illegible]法
等龍に従く雪舟流を學ぶと云
一長谷川久蔵 等伯が二子也 畫彩を能し又よく伝
云 龍院とも号す 文禄元年壬辰 肥前の名護屋[illegible]

来者云 龍額の山影座席の上に彩飾の児帳を経し
一畫師宗阿弥孫 永享七年の冬 室町家季瓊和尚の命下
して毎年畫師献ずる所の畫扇を旨とあらたむく
扇の形に描かしむと云也
一僧等観 秋月と号す 本姓ハ高城氏 世々武門にして薩州比
大守に仕へり 後薙髪出家して僧となる 雪舟を師として畫居
をよくせり 則師に従て中華に入て名を呉域より借
借を得ると云 几卿 己が新意を加へて
一小栗宗丹 畫居を好て周文を師として自一家をなし
室町家に仕へり おもふ所の如く剃髪して宗丹と

明治二十年八月
第八一八号

座と称せう或ハ晩年ニ大徳ニ居て号を撥ニ絶寂し
別号を自渓と称ス別傳云義敬公の画師也八冊
法ハ元旋氏此人永享年中人之
一雲谷等顔 雪舟より三世の画孫之元ハ西国の画子
之隨ふ揚門が絵冊ともいへ雪舟流をまなふよし
一真相 相阿弥又鑑岳と号し又松雪斎とも号す真ハ義政
子之云芸阿弥 慈照院殿ニ仕へ又祖ニ続て等伯ニ倣し
茶人ニ有り此道の名人而能書此号宝屋とも号し龍吾ニ真蔵
六十七歳ニ去せしが其名を後年まで知